



Veritas No.31 (2006.3.15)

目次 (敬称略)

<美は原理となるのだろうか——卒業生・新入生の皆さんへ>

浜下 昌宏 (図書館長)

<図書館と私 卒業生特集>

大西 比佐代

喜田 容子

竹田 景子

矢野 キ工

<講演会報告 『齋藤素巖「像を彫る」修復について』>

濱崎 礼二

矢野 梓

<神戸女学院秘蔵のスクエアピアノ>

中村 健

<研究室から>

泥谷 征人

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (4)>

松村 昌家

<図書館からのお知らせ>

井出 敦子

無断転載を禁ず

<美は原理となるのだろうか——卒業生・新入生の皆さんへ>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

いまさら偽装の流行を嘆くのはやめましょう。たしかに、建築家の耐震強度偽装、研究者の捏造論文、政治家の偽メール、等々の騒ぎをみると、文明の進歩はひとを墮落させるというルソーのような思想に賛成したくなります。とはいえ、偽装は今日特有の現象でもなく、日本のお家芸のいわゆるコピー文化、夜郎自大な人たちの脅迫まがいの声高な挑発的言辞、自然食品といわれながら産地偽装やら添加物の過剰な混入、（そしてK姉妹的なケバイ化粧のお姉さまたち）、などを思い起こせばいまさら驚くようなことでもありません。いずれも「オレオレ詐欺」的口先のよさと事件後の後味の悪さが共通しています。（私はこうした事態を”ファースト・フード的卑猥”と呼んでいます。）しかし、柄にもない評論家的言説はやめにしましょう。実際には、私はそれほど悲観的に今の世の中の推移を見ているわけではありません。周囲の学生たち、友人たちを見渡せば、狭い本学の範囲だけでも、じゅうぶん明るい未来を展望できます。もし「暗い」という思いを拭いきれない方がいるとしたら、その方は世間が狭く友人に恵まれていないだけです。2月のはじめ本学に韓国の梨花女子大の前教授の Y 先生をお招きし集中講義をお願いしました。一日、私は先生と受講生たちを案内して兵庫県立美術館を見学に行きました。「山田脩二展」というユニークな企画展が開催中で、企画責任者の同館学芸員 Z さんの説明を聞いたのですが、彼はそのユニークな写真家とその周辺の芸術家・建築家に心底心酔しているようで話はおもしろかったのですが、夢中にお話しするあまりか Y 先生への配慮など示さず、ときには英語で通訳・説明しようかと思っていた私ははらはらしておりました。見学を終えた帰りがけに Y 先生に感想をうかがうと、曰く「Z さんはおもしろい人ですよ」と、じゅうぶん学芸員 Z 氏の人柄を評価しているご様子で、私はホッとしました。それは『忘れえぬ人々』（国木田独歩）を思い出させるようでした。目先のお調子者に騙されることなく人を見る眼の確かな方こそ友人に欲しいものです。芸術・芸術家に熱中できる人は同類に共鳴するでしょう。また、昨年 10 月にポーランドからの M 先生を奈良に案内しました。それなりに日本文化・美学に関心と知識がおりとはいえ、さて奈良国立博物館や春日大社など、どこまで喜んでもらえるものか不安でしたが、お昼の待ち合わせ前にすでに先生は奈良国立博物館まで出かけられて、私と会うや開ロー一番仏教彫刻のすばらしさを賞賛しました。さすがミケランジェロやラファエロの国の人です。宗教的背景は別として美術作品を見る眼は確かです。私はホッとしました。その感性さえあれば私のお連れするところはどこでも満足していただけるであろう、と。実際、東大寺の大仏殿、二月堂といった古刹の見学から昼食の麺、散歩の合間の甘味（スイーツ）、夕食の和食といった食事にとるまで、喜んでいただけました。美や芸術に感動できることのすばらしさは、そうしたものが共通言語足りえ、人格的共感の絆となるからでしょう。今日、勝ち/負け原理はお金や成功の数字で測ら

れます。それはいつの時代であれそうでしょう。廉恥心さえなければ私たちは人前で何でも出来ます。売れるためには矜持は不要です。（今は廉恥心不要、矜持は棄てよ、というビジネス原理一色でしょうか？）しかし、美は誇りを伝えます。先のトリノ・オリンピックでの荒川静香さんの演技は、それは美しいものでした。以前からフィギュア・スケートがスポーツの範疇に入るのか疑問を持っていた私ですが、彼女の演技は芸術作品そのものでした。（彼女が”クール・ビューティ”といわれるゆえんについては知りませんが。）本学で学んだ卒業生の皆さん、これから学ぶ新入生の皆さん、私たちはデフォレスト第5代院長が「美が学院となる」(Beauty becomes a College)と讃えたキャンパスに恵まれています。その恩恵をあらためてかみしめてください。図書館（特に本館）閲覧室のたたずまいも私たちの誇りです。いつでもいらしてください。私は美もまた、生きる力の原理になりうると信じているひとりです。

<図書館と私 卒業生特集>

図書館の思い出

大西 比佐代 文学研究科英文学専攻通訳・翻訳コース

大学生時代が心の片隅で輝く記憶の断片になる、それほど長い月日が流れてから入学した神戸女学院大学。本来の仕事を抱えたうえに体力や気力、もちろん知力の衰えも痛感し、そのうえ岡田山の本学には土曜日にしか行かない—そんな社会人院生一期生を図書館新館は土曜日にも開館する週を設けて暖かく迎え入れてくれました。それがどんなに嬉しかったことか。開館日の土曜日には昼食もそこそこに図書館へと急いだものです。

講演会などに同時通訳として参加することが決まれば、その分野の文献や参考書を何冊も借り出しました。親切な司書の方が「返却は宅配便でも出来ますよ」と教えてくださったので、遠隔地に住む身としてその制度をおおいに活用させていただきました。レポートや論文を書くときはもちろん、新聞や雑誌、辞書を探すときも、鞆が重くなればなるほど心は軽くなりました。

図書館の本館の方はまさに『特別な場所』。平日に大学に来る機会があると、出来るだけ足を運びました。本を探す楽しさ、重厚な建物や調度品、素晴らしい窓からの眺め。知

性と自然と時の流れの織り成す絶妙なバランスを味わえる場でした。

卒業すれば、女学院の図書館との接し方は変わるでしょう。ですが、きっとこれからも通い続けるに違いないと確信しています、「とりあえず女学院の図書館に行ってみよう」とつぶやきながら。

図書館と私

喜田 容子 文学部総合文化学科

学長が4年前の入学式の時におっしゃった。「4年の大学生活の間に、キャンパスの中で自分にとっての特別な場所を見つけてほしい。」一女学院のキャンパスで美しい場所を発見する度にその言葉を思い出す。

私がより多くの時を過ごした場といえば図書館である。新館には清新な雰囲気漂っているが、私が好きなのは本館である。4年生になるとしばしば訪れた。ここには、女学院のスピリッツというものを感じる。この建物自体が女学院の歴史を語っている。その美しさは女学院の建物全てに共通したものともいえる。

しかし、図書館でみられる光景に心打たれることがある。本館の扉を開けると正面に広がる窓から光がさしこんでいる。その光のなかで、学生たちが一心に本に向き合っている。この何気無い姿が私にとっての女学院らしさとして目に焼きついた。院生がいつも同じ場所で静かに本を読んでいた。「あの席は彼女の場所」と思えるほどに。その姿は、私に、学ぶことの美しさを感じさせてくれるものだった。静かに何ものかに向き合い、自ら問いつつ本を読む姿。この「真摯」を包んでいるのが図書館なのだ。

図書館に行ってみよう

竹田 景子 音楽学部音楽学科

専攻の関係で、学内にいくつかある図書館(図書室)のうちで私が最も良く通ったのは音楽館にある音楽学部図書室です。おそらく音楽学部生のほとんどがそうだと思いますが・・・。

私は他大学の音楽とはほとんど関係のない学部出身で、でもどうしても専門的に音楽を学びたくて女学院に編入したのですが、初めて音楽学部図書室に入った時にとっても驚いたことを覚えています。「音楽」学部だから当然と言えばそうなのですが、いろいろな楽器の楽譜がずらっと並んでいて、パソコンで検索できるのは書籍だけでなく CD も検索できたり。音楽を勉強しているんだなあ、と実感したもののうちの一つです。

私は本屋さんや図書館の中にいると「ここにある全ての本を、一生かけても読むことはできないんだなあ」と、嬉しくもあり悲しくもあり、なんとも言えない気分になることがあるのですが、この図書室でも似たような感覚を味わいます。「ここにある楽譜の全ての曲を演奏するのは絶対に無理だな」「そもそもここにある CD すべてを『聴く』ことすらかなわないだろう」と。でも、これまで多くの人が形にしてきた楽譜や録音を前に、音楽の流れ、のようなものが少しいメージできます。そして、自分がいま取り組んでいる曲に何か縁を感じます。

もちろん、楽譜や本を借りたり CD を聴いたり、普通に(?) 利用させても頂きました。図書室はこの2年間の勉強にとって欠かせない場所で、スタッフの方々も皆さんとても親切で、いろいろと助けていただきました。新入生の方にも、図書施設に限らず学内の施設は積極的に利用されることをお勧めします。そうすることで、大学生活がさらに充実したものになることは間違いないと思います！

女学院の「森」

矢野 キ工 人間科学研究科人間科学専攻

私は、人間科学研究科で2年間学びました。多くの魅力ある先生方に出会い、学友に刺激され、振り返るとあっという間の2年間でした。

この学びの地で私が最も好きだったのは、「森」でした。正門をくぐって坂を登りつつ、周囲の木々を眺め、風をうけて歩いていくうちに、思想の森に入っていきような感じがしたものです。歩きつつからだ全体で空気や風を感じ、ふーっと息をはくと、何とも言えない心地よさがありました。それは、私の所属する教会の小さな森の感じとも似ていました。一歩坂道に足を踏み入れると、そこは何か違った空気があるのです。そして一歩一歩、歩みを進めるうちに、風が私をやさしく包みながら、精神的な世界に導いてくれるのです。無理なく、自然に、その日その日の私のペースで。

2年間の学びのいろいろな場面を思い出しながら、静かに思索し、深く感じていくことを推し進めていただけたなあと感謝の思いで一杯です。授業での先生や学友とのやり取りなどはもちろんですが、その他にも思い出していくと、ここにもあそこにもと、思い出されてきます。図書館は、たいへんお世話になったところの一つですが、図書館員の方がいつも静かに丁寧に対応してくださるのは、心地のよいものでした。時折慌てて文献を探しているときも、次第に心が落ち着いてきたものです。図書館も思想の森の一つです。静かに思い巡らすことのできる雰囲気は様々なものによって作られていくのでしょうか、本を書棚に整理しておられる図書館員の方の姿にもそれを感じました。

その他、警備の方、お掃除の方、花を植えておられる方などなど、それぞれの場所で静かに作業しておられる姿が印象的でした。このような一人一人の働きがあって、全体を包んでいるようにも思えました。

落ち着いた建物や庭と共に、こういった環境は、多くの人の叡智や労力や費用が注がれていることでしょう。それが目に見えない空気として感じられ、学びを深めていくには非常に重要なことであることを思われます。

深みは、深まったと思った途端に浅瀬に変わる。深みに向かって歩み続けていくことが大切なのだ、と敬愛する牧師がよく言われていることばです。私も深みに向かって歩み続けたいと思います。そして時々女学院の森を訪れたいと思います。

卒業なさっても、同窓生のみなさんと図書館のお付き合いは生涯続きます！
同窓生用 LIBRARY CARD のお申し込みは新館カウンターで。

<講演会報告 『齋藤素巖「像を彫る」修復について』>

創立130周年と、図書館所蔵の「像を彫る」修復を記念して、神戸女学院大学図書館主催特別講演会を、下記の通り開催いたしました。



日時：2005年11月25日（金）午後2時（開場 午後1時）
場所：神戸女学院図書館本館閲覧室

讃美歌 『讃美歌21』412番 1節・2節

開会挨拶および講師紹介

神戸女学院大学図書館長 濱下昌宏教授

講演 齋藤素巖「像を彫る」修復について

宇都宮美術館学芸員 濱崎礼二氏

質疑応答

展示 「創立130周年を覚えて一

神戸女学院が受け継いできたもの一」

学院資料特別展示

懇話会（KCC ルームにて）

ご参加のみなさまには、この神戸女学院に、図書館に、「像を彫る」があって、本当によかった、そう感じていただけたのではないのでしょうか。修復時に見つかった新聞の日付の謎から、設置後に、東京での展覧会出品のために一度貸し出しをしていたという新事実

が判明するなど、大変刺激的でもある素晴らしいお話を伺うことができました。講師の濱崎先生から、Veritas のために、改めて原稿を頂戴いたしました。

神戸女学院蔵「像を彫る」と齋藤素巖

濱崎礼二 宇都宮美術館学芸員

神戸女学院のキャンパスは、国内でも有数の美しさを誇っている。端正な中庭を取り囲むスパニッシュ調の建物と緑豊かなキャンパス。さながら、それは小高い丘の上に突如現れた楽園の感がある。

中庭の南に位置する図書館 2 階の閲覧室に、ひとつの彫刻がある。聖母像を彫る匠の姿とその様子を見守る人々を描写した浮き彫り(レリーフ)の作品。登場人物は華奢な柱とスパニッシュ調の文様によって装飾された建物の中で、この一幕の景を演じている。聖母像という主題といい、スパニッシュ調の建物といい、この作品は神戸女学院とその建築にあつらえてつくられたとしか思えないほど、寸分の狂いもなく調和している。「像を彫る」と題された本作品の作者は、齋藤素巖という彫刻家である。

齋藤素巖、本名、知雄は、1889 (明治 22) 年、東京新宿市ヶ谷に生まれた。父、友三は、1875 (明治 8) 年に紙幣等の印刷技術を日本に伝えるため明治政府大蔵省紙幣寮によって招かれたイタリア人、エドアルド・キヨッソーネ (彫刻師、銅版画家) にその技術を学び、大蔵省印刷局彫刻課工手として勤めた人であり、また「白馬会」にも参加した洋画家でもあった。その父は何故か知雄の東京美術学校彫刻科進学に反対したため、知雄は泣く泣く西洋画科に入学する。美術学校卒業後、知雄は島根県杵築中学校に教師として赴任するが、父、友三の他界を機に再び彫刻への志を再燃させる。そして翌 1913 (大正 2) 年、杵築中学を退職し英国に留学、王立美術館にて彫刻家・アルフレッド・ヘンリー・ピングラムのもとで彫刻を学んだ。

ヨーロッパで本格的に彫刻を習得した齋藤は、帰国翌年の 1917 (大正 6) 年、第 11 回文展に「秋」で初入選を果たす。「素巖」の号を用いるのはこのときからである。この時制作された「秋」は浮き彫り(レリーフ)であり、同年の帝展彫刻部の中で浮き彫り(レリーフ)による入選はこの作品のみであった。実は、当時の日本では浮き彫り(レリーフ)という表現技法は、まだ広く普及しておらず、多くは人物の単体像が彫刻の分野での主流をなしていた。しかし、英国留学した齋藤は、彫刻とは単体像だけでなく、群像や浮き彫り(レリーフ)、建築装飾等、幅広い表現領域があることを学び、帰国後、積極的に彫刻の表現領域の可能性

を示してみせた。齋藤は帝展出品 7 回のうち、実に 6 回まで浮き彫り(レリーフ)を出品している。その後も毎年入選を重ね、1922(大正 11)年の第 4 回帝展以降は審査員となった。しかし、当時の帝展彫刻部内は内紛が多く、審査もけっして公平といえる状態ではなかった。それに業を煮やした齋藤は、1925(大正 14)年に帝展本部へ審査の公平性を求める意見書を提出したが聞き入れられず、その年の帝展への出品をボイコットした。そして翌 1926(大正 15)年、彫刻専門の団体「構造社」を結成し、在野へと下ることになる。

さて、帝展出品を取りやめたとき、実は齋藤はその年の第 6 回帝展に出品する作品をすでに仕上げていた。「石彫り」と題されたその作品は、とうとう帝展に出品されることはなかったが、1927(昭和 2)年に始まった「第 1 回構造社展」に出品番号 1 番の作品としてその優美な姿を現すことになった。その際、齋藤は題名を「石彫り」から「像を彫る」に改めて出品した。それが、現在、神戸女学院が所蔵する「像を彫る」である。この作品は、浮き彫り(レリーフ)を得意とする齋藤が、従来の浮き彫り(レリーフ)の域を超える造型を目指した意欲作である。祭壇状の造型は作品の中に建築物を取り込み、登場人物は浮き彫りではなく、それぞれが単体の丸彫りという混合技法による新しい浮き彫り(レリーフ)のあり方を示した。

さて、ここで神戸女学院の校舎移転による新校舎建築の経緯についてふりかえってみたい。新校舎建築に際し、神戸女学院は 1929(昭和 4)年に設計をヴォーリス建築事務所に依頼した。翌 1930(昭和 5)年から本格的な設計が始まるが、当初の図書館閲覧室の建築平面図は現在とは若干異なっており、「像を彫る」の痕跡は見当たらない。ところが、翌 1931(昭和 6)年の平面図には、現在作品が置かれている場所に基壇状の構造物が描かれ、そこに[Sculpture]という本彫刻作品をさすとみられる書き込みがある。そして翌 1932(昭和 7)年の立面図には、石の基壇と彫刻作品の寸法まで記載され、その寸法や形状から本作品であると同定できる。そして同年、作品設置に際し、「像を彫る」は齋藤素巖自身から神戸女学院へと寄贈された。

ここでひとつの疑問が生じる。冒頭、神戸女学院の建築に寸文の狂いもなく調和した「像を彫る」は、学院の性格と建築にあわせてあつらえられたとしか思えないと書いたが、ここまでの調査では、ヴォーリスが神戸女学院の設計に取り掛かるときには、すでに「像を彫る」は完成したことになっており、整合性がとれない。もちろん、最初に作品があって、それがたまたま神戸女学院の建築意匠と調和したという仮説も成り立たないではない。しかし齋藤素巖はそれ以前にも以後にも、聖母を具体的に扱った作品がなく、またスパニッシュ調の意匠をほどこした作品もないことから、今後のさらなる調査を要する問題である。

ところで、その後、齋藤素巖はどのような人生を歩いたのであろうか。

在野の彫刻団体「構造社」を設立した齋藤は、彫刻と建築の調和やその実用化を理念に掲げて、私財を投じて彫刻の普及に努めた。新聞・雑誌等にも多くの文章を寄せ、1941（昭和16）年には、自らの編集発行による彫刻専門雑誌『日本彫塑』を刊行し、論考のみならず海外の彫刻関係論文をも翻訳し、当時の欧米の新情報の提供にも努めた。その執筆量は、日本人彫刻家の中では群を抜くものであり、作家としてのみならず美術界に貢献した役割ははかり知れない。また、夭折していった構造社同人たちの遺作集も自費で手がけ、自宅に開設した構造社彫塑研究所において若手育成にも並々ならぬ情熱を注いだ。構造社は1944（昭和19）年をもって解散したが、戦後は日展を中心に作品発表を続け、1974（昭和49）年、長寿を全うし、84歳で永眠した。



「像を彫る」講演会の感想

矢野 梓 文学研究科比較文化学専攻

齋藤素巖による「像を彫る」という作品は、講演会があるまで、図書館本館の建物に溶け込んでいたので、あまりじっくりと見たことはありませんでした。講演会でこの作品にまつわる話をきいて、この作品が神戸女学院の図書館本館にやってくるまでの経緯、震災を奇跡的に乗り越えたことなどを知ることができました。「構造社」という彫刻家集団の名ははじめて知りました。齋藤素巖が当時、日本にレリーフを学ぶ場がなかったため、ヨーロッパへ留学したという話が、特に私には興味深かったです。「レリーフ」という表現は日本には伝統的になかったのかもしれませんが、日本で建物自体に何か表現を加える場合、彫るという手段ではなく、直接彩色することが多いように思います。ヨーロッパにおいて優れたレリーフの技術が培われたのは建物の素材の問題なのだろうか、等と考えると、「構造社」というグループは面白い位置にいるのではないかと思え、もっと注目されてもいいように思いました。

<神戸女学院秘蔵のスクエアピアノ>

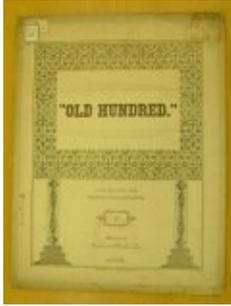
♪~~あめつちこそりて~~♪

中村 健 音楽学部音楽学科教授

「あめつちこそりて~~かしこみたたえよ~~」という古くさい讃美歌があり、歌詞の意味がわからないまま長年歌っている。神戸女学院でも最も古くから歌われている讃美歌のひとつで、オルチン師の新撰讃美歌にももちろん含まれている。メロディー名(Tune Name)が” Old Hundredth” と妙なのは(この” th” どうやって発音するんだろう?… …)、「古い讃美歌集の第 100 番」という愛称からきたようで、アメリカでも昔から愛唱する人が多かったようだ。元ウタは 16 世紀のスイスというから、カルヴァンとも関係がありそうで、由緒正しき履歴を持つ。そう言えばペリーたちが浦賀沖の艦上で礼拝を守ったときの讃美歌リストに「旧百番」とある。とすると「あめつちこそりて」はもっとも早く日本で歌われたプロテスタント讃美歌かも……？

図書館本館一階ロビーのガラスケースにあるスクエアピアノはニューヨーク生まれの 145 歳。ペリー来航の少し後の製造、数奇な運命を経て 1890 年神戸女学院にプレゼントされた。たかがピアノ一台とのたもうなかれ、まだ日本にピアノなんてほとんどないころの、しかも新興とはいえ万博金賞受賞のスタインウェイ社の最高級品ブランド品だ。ヴァイオリンなどの弦楽器は古ければ古いほど音に深みと艶が増す場合もあるが、ピアノは寿命が尽きれば粗大ゴミ、古いピアノは博物館などでしかお目にかかることができない。しかし我がスクエアピアノは今でも演奏可能、というからすごい。音楽学部では今年の 10 月にこのピアノを主役とするイベントを企画した。数週間前からピアノを音楽館に運び、湿度温度を演奏に適した環境におき、弾きこみをしている。楽器というものは弾きこまないと音は出ないのだ。

選曲には図書館の協力を得た。古い古いお宝資料が届けられた。「開架されていない古い楽譜が陽の目を見た……」といたいところだが、現在では演奏されることのない名曲の発掘なんてそう簡単にはいかない。大概はクダらないから演奏されなくなっていったのだ。何とか数曲を選び出したものの、「ピアニストが喜んで弾いてくれるだろうか？」という不安が残った。



松方ホールでのスクエアピアノの演奏会のピアニストは本学卒業生の添田ゆみさんで、1995年にこのスクエアピアノが復元されたときの在学生代表の公式ピアニストのひとり。彼女には Schleifarth とかいう聞いたことのない作曲家のピアノ小品の譜面をおそろおそろお渡しした。図書館提供の、本学に保管されているもっとも古い楽譜のひとつだ。その曲名は“Old Hundred—Variations” 例の讃美歌による変奏曲だが、およそ名曲とはいいがたい。讃美歌を主題とし、それを変奏曲にするなんてアイディア自体がどうかと思うし、作曲技法もいかにも稚拙、演奏されなくなったのも当然の陳腐な曲だ。当日はスクエアピアノを休みなく連続して演奏するのは楽器に負荷がかかりすぎると言うので、間にお話を挟むことになっていた。そこで私は次のようなコメントを用意した。「お聴きいただいとおわかりのように、実にくだらない未熟な曲です。ブラームス、ヴェルディ、ヴァークナー、R.シュトラウスなどがしのぎを削っていたヨーロッパに較べると、当時のアメリカは音楽的にはまったく後進国で……………」

ところが……である。サウンドチェックのリハーサルの時、どうも様子が妙なのである。添田さんが「あの曲いい、好きだ。」と言い、立会いの人たちが皆、「素晴らしいですねあの曲、よくあんな曲見つけてくれましたね。」と口々に私を称えるのである。お世辞ではなさそうだし、大教授としての私の威光によるものでもなさそうだ。気弱な私は結局、本番で「いかがでしたか？昔の人はこのピアノできっとこの曲を聴いていたことでしょう。」とコメントして、お茶を濁している。まったく大教授にあるまじきテイタラクである。意味も気にせず「あめつちこそりて」を大声で歌っていた報いだろうか…………？

参考図書：

『讃美歌 21 略解』 日本基督教団讃美歌委員会編 日本基督教団出版会 1998/5

「あめつちこそりて」は『讃美歌 21』では 24 番。歌詞が変更されている。

『黒船来航と音楽』（歴史文化ライブラリー117）笠原潔著 吉川弘文館 2001/6

図書館注：

中村先生の作品にも讃美歌を主題とする変奏曲があります。1台8手(ピアノ1台にピアニスト4人)の珍品です。未出版。

<研究室から>

宗教詩人ワーツワース

泥谷 征人 文学部英文学科教授

じっくり時間をかけて文学作品を繰り返し読むと、それまでことばの陰に隠れていた世界が目の前に見えてくるから不思議である。優れた作品であればあるほど、反復して読む作業はさまざまな面で新しい発見を可能にし、新鮮な驚きと感動で満たしてくれる。この感動は文学研究者へのかけがえのない報酬である。

長い間第二の世代のロマン主義詩人、バイロン、シェリー、キーツを中心に研究し、教えてきたが、ここ数年、自分の関心に変化が現れたこともあって、授業でワーツワースの作品を集中的に取り上げてきた。『序曲』の中で、朝焼けの光景が臨場感溢れることばで描写された箇所を、大学院で初めて読んだときの感動が懐かしく、ワーツワースを久しぶりに読み直したい衝動に駆られてのことであった。かれの詩を注意して読めば読むほど、その美しさと奥深さに以前よりいっそうの感動を覚え、またそのスケールの大きさに深い感銘をうける。ワーツワースの詩想の深遠さに触れることができる喜びは大きい。

湖水地方に生まれ育ったワーツワースは、その豊かな自然に抱かれて生涯を送った詩人である。自然詩人と呼ばれているゆえんである。しかし、ワーツワースの自然は視覚的に捉えられる外の世界のみを意味しているのではない。もうひとつの、より高い次元が同時に意識されている。ワーツワースの自然は *natura naturans*—絶えず活動している有機的な生命体、あるいは感覚で捉えられながらも、同時に感覚の世界を超越する大きな存在、シェリーのことばを借りれば、「目に見えぬ力」とでも呼ぶべきものである。その力をワーツワースは神とは呼ばないものの、限りなく神に近い存在であると認識していたと解釈しても間違いではない。それは神的な靈性に溢れた存在であり、瞑想を通してのみ感知することができる。ワーツワースと自然との関係は、詩人の魂とこの大きな力との間に成り立っており、かれが「自然との交わり」と言うとき、それはまさにこの高次元での交感を意味している。この交感を通して自然との完全な関係が確立されるとき、一体化が完成され、魂は浄化され、至上の喜びを享受することができる。内なる楽園が実現される瞬間である。

それでは、ワーツワースにとって、詩人とは何だったのか。詩人は、ワーツワース自身のことばによれば、「人々に語りかける者」である。別言すれば、自然界・人間界に命の息を吹き込む力について語る役割が与えられた者なのである。ワーツワースは、神の言葉を人々に伝えた旧約の預言者たちになぞらえて、自らを自然と人との仲介者—預言者—と見

なしたのである。かれの詩は、自然界に居ながら、それを超越する次元での自らの霊的体験の記録であり、読む者にその喜びを共有する可能性を提示する。この宗教的体験を基盤とするワーツワースの詩的感覚を、キーツが「自己中心的崇高」(キーツには少なからず思い上がりに見えたことは明らか)と形容したとき、それは、ワーツワースがいかに宗教詩人と呼ばれるにふさわしい感性の持ち主であったかを、間接的に裏付けることばとなっている。

自然との一体化が霊的体験であることを読み手に認識させる手段として、ワーツワースが頻繁に用いているものがある。「飲む drink」、「食する feed」、「命を吹き込む breathe」、そして「清い pure」などの重層的な意味をもつことばである。最初の二つは明らかに聖餐式を想起させ、三つ目は創世記のアダム創造の場面を彷彿とさせる。四つ目は、「山上の説教」でイエスが用いていることばであり、これらはすべて聖書的(キリスト教的)な意味を含んでいることが分かる。しかし、注意しなくてはならないのは、ワーツワースは、これらのことばを用いることによって、キリスト教信仰とかれの自然崇拜を同一視しようとしているのではない。キリスト者が馴染んでいることばを用いることによって、自然から与えられる喜びはキリスト者が神から与えられる霊の糧と同質のものであることを強調しているのである。意図的に選ばれたこれらのキリスト教用語は、自然と人間の関係が豊かで、しかもキリスト教徒と神のそれと同じように、霊的な体験そのものであることを実感させる効果を生み出している。

ワーツワースの宗教性を解明するために、ワーツワースと聖書、あるいはワーツワースと神、といった視点からかれの作品をもっと深く読み込んでみたい。ワーツワース研究に新しい方向性を示すアプローチだと思うからである。研究室を明け渡すときがきてしまったけれども、その思いを近い将来具体的な形に仕上げたいと願っている。長年温めているテーマであるバイロンの宗教性の問題とともに、これからの研究生生活の挑戦に値する課題になりそうである。

＜ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション（4）＞

ディズレイリの「処女演説」その2＞

松村 昌家 大手前大学大学院教授

1837年12月7日、保守党議員として国会に初登場したディズレイリは、アイルランド選出のベテラン議員オコンネルの演説が終わると立ち上がった。そして歴史的な処女演説の雄弁をふるい始めた。アイルランドにおける選挙の非合法性を論じて、オコンネルを槍玉にあげるのが狙いであった。

野心満々の意気込みをもってさっそうと登場したまではよかったが、問題が問題であっただけに、相手側から激しい野次と怒号がとび、熱弁をふるえばふるうほど、爆笑や揶揄が激しくなって、彼はだんだんと分の悪い立場に追いやられた。彼の論法よりも、むしろ彼の奇抜なスタイルや、新参の議員らしからぬふてぶてしさが、悪影響をもたらしたようだ。

そんななかでディズレイリは、相手の最も痛いところを突くために、オコンネルの支援を目的として行われた募金活動の一件をもち出した。1人50ポンドを拠金額として3,000ポンドの募金達成を目標にした活動であったが、結果は無残な失敗に終わった。このことに対してディズレイリは、「折角の高潔な物乞いのプロジェクトも、かくして完全に水泡に帰したのであった」と皮肉をぶっつけた。一段と激しい野次がとび、爆笑がわき起こる。

彼は次に、アイルランドにおける腐敗選挙の問題を取り上げた。1832年の選挙法改正法案が国会を通過したときに、これを支援した議員たちは、大いなる希望をそれに託したはずなのに、今やそれは絶望に変わっている。なぜならば、その法案には、議員指名制に終止符を打ち、下院から選挙区売買の汚点を拭い去る期待がかかっていた。にもかかわらず、指名制は依然として野放しの状態、そして選挙区の売買の汚れは、「ただ一段と暗黒の色を深めているだけではないか。」

このあたりで下院全体が騒然となり、ディズレイリの声はそのためにかき消され、立ち往生同然の状態になった。そのときの状況を伝える原文の一部を訳出しておこう。

どうかあと5分間だけ耳を貸していただきたい。(大爆笑)私が今夜ここに立ったのは、議長——(ここで院内が騒音に包まれて、名誉ある紳士はしばらく一言も発することができなかった。混乱がいくらか収まると彼は続けて言った。)議長、私が今夜ここに立ったのは、形式上のことではなくて、ある程度事実上、相当数の国会議員を代表してのことです。

(爆笑)

あとは何を行っても駄目、一言一言が爆笑とさまざまな叫び声にかき消されてしまうありさまであった。さすがのディズレイリも性根尽き果てて演説を打ち切らざるを得なかった。しかし、ここで彼は声をはりあげて言った。「よろしい、私はこれで着席しますが、あなた方が私の言うことに耳を傾けるときが、必ずくるでしょう」 彼の最後の言葉を聞き逃した議員は、おそらく一人もなかったはずである。

以上見てきたように、ディズレイリの処女演説は、惨憺たる結果に終わったのだが、その内容は果たしてそれほど馬鹿げて支離滅裂なものであったのか。冷静に読んでみると決してそうではない。ただ先にふれたようなディズレイリの態度、そしていかにも芝居がかった問題の出し方に、大方の聴衆の反感を買う原因があったのである。なかには彼の真価を見てとった大物もいた。保守党のリーダー、ロバート・ピールは、その一人である。ピールは、表だって国会での演説に声援を送るようなことをしなかった。自党議員の名演説にも、滅多に賛辞を呈したことがなかったといわれる。その彼が、ディズレイリの演説には、珍しく熱と力のこもった声援を送りつづけていた。

政党的な片寄りを排し、公平な立場でディズレイリの演説を報じた『モーニング・クロニクル』紙のコメントもまた、注目に値する。

われわれが〔ディズレイリの演説を〕滑稽だと言ったのは、彼の放縦な思考と発想と身ぶりによって、議員たちのあいだに頻繁に笑いがわき起こっていたからである。その名誉ある議員が、やがて茂りすぎの余分な枝葉を切り落として出てくようになれば、きっと皆が彼の言うことに耳を傾けるようになるであろう。

その日は遠からずしてやってきた。この日から1週間後の12月15日の国会でディズレイリは、今までの教訓を生かして2度目の演説に挑戦、初回とは雲泥の差の成功を収めた。しかし、真の意味で彼自身の予言が実現するのは、1838年3月15日の国会で、穀物法擁護の演説を行ったときだ。姉のセアラあてに書かれた長文の手紙の中に、そのことが躍如として描かれている。保守党の議員連からは「最高級の出来栄え」として絶賛され、与党ホイッグ内閣で内相になっていたジョン・ラッセル卿も「久しぶりに聴いた最高の名演説」と、舌を巻くほどであった。(つづく)

<図書館からのお知らせ>

井出 敦子 大学図書館閲覧係

●図書館所蔵『神戸英和女学校共励会誓約』について

図書館の貴重書庫の中に、ぼろぼろで、中身の知れない掛け軸がありました。そっとあけてみると、『神戸英和女学校共励会誓約』の文字が。調べてみますと、後に第4代院長となられたソール先生によって、1893（明治26）年2月、学内に「キリスト教信徒共励会」が創設され、この会のために献身を誓うものを会員として、さまざまな活動がなされていたようです。翌1894（明治27）年3月に、本学が校名を「神戸女学院（Kobe College）」に改称しているところから、掛け軸はその一年余の間に作成されたものであることがわかります。今読むとずいぶん堅苦しい日本語で書かれたお約束事の数々。明治時代に学院で学んだ先輩たちが心に刻んだその言葉を、この学院に関わるみなさまに広く長く伝えるために、図書館では原本を修復し、「太巻き」（資料の折れを防ぐために掛け軸を太めに巻く）という形で保存、閲覧展示用に写真パネルを作成いたしました。今年度末、図書館本館閲覧室には、新たに縦型の展示ケースが設置されることになっておりますので、記念行事等が開催される折にはオリジナルをご覧ください機会も設けていく予定です。

現代表記文



余は身も魂も神に捧げ、凡て神の命じたまう

所は之を為さんことを務め、余の生涯の標準を
主エスに取り、日々聖書を読み祈りをなし、常に
主に倣いて世を送らん事を期し、且つ、万事己の属する
教会を助けん事を約す。余は会員としてその義務を
全うし、主の前に良心の咎なくして述べる理由ある
にあらざれば本会の集会に必ず出席し、且つ、讚美の外祈
禱感話し、又は、聖句を読みて之を助くる事を約す。

みなさんどうぞ、原文解読にチャレンジしてみてください。
画面上ではちょっと難しいかもしれませんが、ご予約により
写真パネルをご覧いただくことができます。
変体仮名漢字表記文（旧字）・変体仮名かな表記文（旧字）
も作成してありますので、ご希望の方は本館閲覧カウンター
にお申し出ください。

●学院資料のデジタル化に関するご報告

図書館では、2002年度より、所蔵学院資料のデジタル化を進めています。これまでの文字・画像資料に加えて、今年度は音声資料のデジタル化にも着手いたしました。第4代院長ソール先生の朗読、第5代院長デフォレスト先生の流暢な日本語、また英文学科の名物教授でいらしたボガード先生の正しい英語の発音など、貴重な音声が含まれています。